

大人の眼と子供の眼

水上瀧太郎

青空文庫

私わたしの子供の頃のことであるが、往來を通る見ず知らずの馬車の上の人や車の上の人におじぎをして、先方がうっかり礼をかえすと、手をうって喜ぶいたずらがあつた。日にっしん清戦争の頃で、かつ陸海軍の軍人の沢山住んでいた土地柄、勲章をぶらさげて意気揚々として通る将校が多かつた。向こうの方から、金モールを光らせて来る姿を見ると、車の前につかつかと進んで、帽子をとつたりして得意がるのであつた。子供のいたずらと知つて、すまして通り過ぎるのもあり、笑つて行くのもあるが、中にはおあいそに礼をかえすのも、またうっかり誘われて本気で手をこめかみに上げる人もあつた。偉い大人おとなが自分たちの相手になつてくれた嬉うれし

さと、偉い大人を相手にさせてやったという力量をほこる心持が、ちやんぼんに心の中で躍おどった。たった一人、いくど繰返しても、うかとは手に乗らない苦手にがてがあつた。その頃は少佐か中佐か、いくらよくても大佐だつたらうが、後の海軍大将伯爵 山本権兵衛うえである。毎日馬車に乗つて、参謀の徽章きしょうを胸にかけて通つた。不思議に子供も名前を知つていて、権兵衛ごんべえが来た来た、口々にしめしあわせながら、先を争つて帽子をとつて頭をさげた。しかし権兵衛さんは、頬髯ほおひげに埋うづまった青白い顔に、陰性の凄すげい眼を光らせて睨にらみつけるばかりで、微笑を浮かべた事さえなかつた。

「権兵衛が種蒔たねまきや鴉からすがほじくる……」と子供はくやしがつて、

馬車のうしろから追いかけてながら、はやし立てるのがおきまりだった。

だが、自分がここに記しるそうとするのは、権兵衛さんの面影おもかげではなく、同じくその往来の出来事で永ながく心に残って忘れられない白馬はくばに乗った人の事なのである。それを、子供の眼が、いかに實際あるよりも美しく見るものかという例証のひとつにしたいたいのである。

夏の日の事である。門前で遊んでいると、遠くから埃ほこりをあげて、まっしぐらに白馬をかけさせて来る人があった。西洋の狩猟の絵に見るような黒い鳥とりうち打帽子をかぶり、霜降しもふりの乗馬服に足ごしらえもすつかり本式なのが、鞭むちは手綱たづなと共に手に持って、心持前ま

えかが
屈みの姿勢を崩さず、振向きもせずに通過ぎた。僅か一瞬間
の事であつたが、子供の眼には仰ぎ見る馬上の姿が、天かけるよ
うに聳えて高く見えたのである。

「いいなあ。」

子供は一せいに感心して、見る見る町角まちかどに消えて行く白馬の
行方ゆくえを見送つた。

「おいらも今にあんな馬に乗つかるんだ。」

一番頓とんきよう狂かんぶつやな乾物屋の子は、ありあわせの竹の棒にまたが
つて、そこいら中をかけずり廻つた。

「馬鹿、てめえみたいな鼻つたらしが馬になんか乗れるもんかい。
あの人なんて百円の月給取とりなんだぞ。」

年かさの車屋の子は、はしやぎ切つて汗を流している奴を叱りつけた。

「百円？ おつかねえ、おつかねえ。」

乾物屋の子は目をまあるくして、おどけた顔つきだを突出した。

「百円の月給だつてさ。」

周囲の者も口々に驚嘆の声を発した。驚くほかに何らの考えも浮かばないほど、当時の子供の頭には、百円という金が大金だった。口でこそ百円とひと口にいうけれど、その分量も直ねうちも到底想像出来なかった。

その連中にまじつて、自分は声こそ出さなかったが、心ひそかに驚嘆していた。自分も大きくなったら、あんな立派な馬に乗り

たいが、百円の月給取にならなければ駄目だめなのかと思うとがっかりした。いったい世の中に、どういう人が百円なんていう莫大ばくだいもない月給をとるのだろう、大将かしら、大臣かしら、いろいろ考えたがわからなかった。話に聞けば自分の父も、自分が生まれない先に役人をしていた頃は、馬に乗って役所に通かよったそうだが、どうも百円の月給取ではなさそうに思われる。しかし万一、父が百円の月給取だったら、どんなに嬉しいことだろうと、その事ばかり考えていた。

夕方になって、「蛙かえるが鳴いたからかえろ。」と我がちにいいながら、おなかをすかしてうちに帰ったが、自分はすぐに母のところへ飛んで行って、父の月給がいくらであるかきいた。

「なぜそんな事をきくのです。」

「なぜでもないけれど、百円？」

母は黙つて自分の顔を見ていたが、

「そんな事をきくものではありません。」

といったばかりで取合わなかった。金銭のことを口にするのは卑しいことだと、おちぶれ士族の娘である母はかたく信じていて、^{へいぜい}平生から子供たちにいいきかせてあつた。

それつきり自分は口をつぐんでしまつたが、たつた一瞬間にして通り過ぎただけの白馬鞍^{あんじょう}上の紳士の姿は、一生涯忘れられないほど爽^{さわや}かに眼に残つた。どうかして、自分も大人になったら、偉い人になつて百円の月給取になろうと、あたかも天下を望むよ

うな大きな事として考えていた。百円の金きんだか高は、広大無辺に思われたのである。

ある時、母方ははかたの叔父おじが来て、自分はその膝ひざの間で遊んでいたが、ふと思ひ出してきいて見た。

「叔父さんはうちのお父さんの月給いくらだか知ってる？」

叔父は不思議そうな顔をして見おろしていたが、目尻めじりに微笑が浮かんだので、自分は安心して重ねてきいた。

「百円よりも多い？ 少ない？」

「多いとも、倍も三倍も多いだろう。」

自分は嬉しさに顔が紅あかくなる位だったが、あまり無雑作むぞうさに、かつ意外な返事だったので、半信半疑だった。

「それじゃあ叔父さんは？」

「叔父さんか。叔父さんは百円の半分のまた半分位かな。」

そういつて太い声で笑った。

父の月給が百円より多いらしく思われて来た事は、やがて自分も白い馬に乗ることが出来そうな氣持を起こさせた。嬉しくて堪^{たま}らなかつた。そうして、そういういい返事をしてくれた叔父が、やはり偉い人に思われた。叔父さんの月給が、百円の半分のまた半分なんていうのは嘘^{うそ}にちがいない。嘘だからこそ後^{あと}で笑つたのだと思つた。

その馬上の紳士の姿は、二度と見たことがないが、それから三十年たつて、自分は百円の月給取になつた。その時、自分は馬に

乗るどころでなく、一家を構える力もなく、下宿屋の二階にくすぶつて、常に懐中の乏しさに難^{なんじゆう}渋^{しぶ}し、朝夕^{あさゆう}満員の電車に鱒^{いわし}の罐詰^{かんづめ}の姿をして乗らねばならぬ身の上だった。もちろん、物価が驚くほど高くなつたことと、貨幣の直打^{ねうち}の変わったことを考へに入れなければならぬが、しかし子供の時に考へた百円は、今日の壹万円よりも拾万円よりも百万円よりも莫^{ばくだい}大なものであつた。

上に引^{ひき}合^{あい}に出した叔父についても、英雄崇拜の思い出がある。叔父は慶応義塾を出て、郵船会社に勤めていた。海上勤務の頃は、事務長をしていたのか、あるいはその下^{した}役^{やく}の事務員かは知らないが、歐洲航路の船に乗って、しばしば珍^{めづ}しいおみやげを持って

来てくれた。六尺近い大男で、日本人には類のない白^{はくせき}皙^{おもて}の面^{おもて}にやや赤味を帯びた口^{くちひげ}髭^{ひげ}をはやしていた。それが金筋の入った正服を着て、当時はまだ珍しかったバナナだの、パイナップルだのの籠^{かご}をさげて帰って来る姿は、自分の異国趣味を十分満足させた。文明開化という言葉が流行し、何の品でも質のいい物は上等舶来と唱えた時代だから、西洋といえど何よりも美しい国におもわれた。自分は叔父にせびっては、ヨーロッパの港々の話をきかしてもらった。

しかし叔父を崇拜するのは、単にそのためばかりではなかった。それよりも叔父の投げる小石が子供の眼にははつきりと距離のはかれないほど遠くまで飛んで行くことに敬服していたのだ。

叔父の家は木挽町こびきちょうにあつた。二階一室に階下が三室位の小さな家で、自分から見れば祖母にあたる母親と、自分から見ればやはり叔父で、まだ高等小学校に通う位の年配だつたから、豆叔父さんと呼んでいた叔父の弟と、台所を働く婆ばあやとで暮らしていた。涙脆もろく、金銭にしまりのない、お調子に乗りやすい性質を多分にうけついで自分は、まぎれもなく母方の血を引いているので、子供の時からこの祖母のごひいきだつた。伶俐りこうな兄は父方の祖母のほめ者だつたが、母方の祖母は自分をつかまえて、おまえは兄さんよりもきつと偉くなるよ、と無責任なことをいって可愛がつてくれた。時々そのお祖母さんの寝顔たぬきが狸に見えて、夜中に泣き出すこともあつたけれど、年中とまりがけで遊びに行つていた。二

階の縁側に置いてある籐椅子とういすの上に足を投出なげだして、目の前の川を漕こぎ下くだるボートを見るのが楽しみだった。夕方叔父が会社から帰って来る頃は、祖母に手を引かれて河岸かしに出て待っていた。大男の叔父の姿が見えると、自分は祖母の手を振切つて、半丁ばかりかけていって、叔父の手にすがりつくのであった。

この甥おいを喜ばせるために、叔父は小石を拾つて川水の上に遠く投げて見せた。真似まねをして投げる豆叔父さんの石は川の真中ぐらいで水に落ち、更にその真似をする自分のは、足もとの浅瀬あさせに水音を立てるのであったが、叔父のは向こうの海軍大学の石垣にぶつかるのであった。その向う岸は幼い者にはひどく遠方に見えた。早く叔父さんのように大きくなりたいなあと、つくづく感じたも

のであった。川を越えて石を投げ得る人は、あらゆる事の勇者であるような気がしたのである。叔父はその後友人の負債の責任をしよつて東京にいらなくなり、各地を流転るてんしたあげくに、殆どほとん誰も知らないような状態で、北海道で死んでしまった。

つい近頃往年の木挽町の河岸をぶらついた事があつた。町の様子にも変りはなく、向う岸の海軍大学の景色も普通りだつた。だがはなはだ甚しく意外に思つたのは、川幅の至つて狭いことだつた。子供の時に見た大人の偉さと同じく、大人になつて見ると大したものではなかつたのである。

祖母も叔父も豆叔父も今は世になき人であるが、叔父の住んでいた家は以前のまゝ残つていて、知らない人の表札がかかつてい

た。去るに忍びない心持もあつたが、幸い附近の人影も見えないので、足もとの小石を拾つて向う岸まで投げて見た。別段力を入れないでも、無雑作に石垣に届くばかりでなく、樹木の茂つた校庭にも楽々と投げこむことが出来た。二つ三つ投げ、最後のひとつをもう一度石垣に叩たたきつけた時、

「誰だツ。」

と校庭からどなつて、灌かんぼく木のしげみを押分けて顔を出した人があつた。自分ははしたない所為を恥じて一散に逃出した。

ついに自分も大人になつた。しかし、あれほどまでに崇拜した大人が、いかに馬鹿馬鹿しいものであるかをとうに知つてしまつた。あらゆるものに驚嘆し、すべてほんとにある物よりも、大き

く、立派に美しく見る子供の眼を失ったことを悲しみ、永い間、その子供の頃の思い出以外のものは、心から自分を喜ばせることが出来なかつた位落胆した。

言葉をかえていえば、盲目的な憧れの美しさに酔つた自分をなつかしみ、實際の世の中の美しくない事に悲観し、著るしく懷疑的になつたのであつた。

ところが最近になつて、自分には更に新しい眼が開かれて来た。それは完全に発達した大人の眼である。徒らに物事に驚かず、よきものと悪しきものの区別を知り、あらゆるものの価値を正當に批判し、しかもなお熱情をもつてよきものを喜ぶ大人の眼が、無批判の憧憬讚美を事としていた單純極まる子供の眼にまさる

喜びを持つことを悟つて来た。

それは物の本体を見極める眼である。価値批判の眼である。単に生々なまなましい色彩に眼を眩くらまされるのではなく、光と共に陰影を見る眼である。単に事物の分量に驚くのではなく、その質を吟味する眼である。子供の眼が夢を見る眼ならば、これは実在を見る眼である。それが幻影を見る眼ならば、これは現実を見る眼である。深く、鋭く、冷静に、世態人情の一切にまで視線の及ぶ眼である。

確かに線香花火せんこうはなびのように容易に熱し、たちまち火花を散らす感激はなくなつたが、同時にまた贗物にせものにのぼせ上がり、くわせ物にだまされることのなくなつたのが、大人の眼の効果である。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学名作集（下）〔全2冊〕」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年5月7日第12刷発行

底本の親本：「日本名作選」日本少國民文庫、新潮社

1936（昭和11）年7月15日発行

初出：「改造」

1923（大正12）年

入力：門田裕志

校正・・noriko saito

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大人の眼と子供の眼

水上滝太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>